

日本語 Japanese 1-6

根津 真知子 ・ 日比谷 潤子

1. コースの編成・スケジュール・単位数

過去10年間の日本語コース (Japanese 1-6) の変遷を顧みるにあたり、1953年から始まった本学での日本語教育50年の歩みの中で日本語コースがどのような経緯で設置されることになり、その後どのような位置付けにあったのかを簡単に述べる。

英語と日本語のバイリンガルでの教育を標榜している本学は、当初は1年間の日本語学習後、日本語での授業を履修できるようにすることを目標とした4年本科生のための集中日本語のみのプログラムであったが、交換留学生 (1年本科生) のために、学習進度を遅くしたコースの必要性が認識されるようになり、日本語集中教育と並行して1956年には週3日6コマの初級日本語 (Elementary Japanese) が開講された。そして、1960年からは週10コマの半集中日本語教育 (Semi-Intensive Japanese) も始めることとなり、この時期は3本立ての日本語プログラムを行っていたが、1966年までで初級日本語を廃止し、その後は集中日本語教育と半集中日本語教育のみを行うようになった。半集中日本語教育は当初1年間のカリキュラムとして始められたが、67年からは2年目の半集中日本語教育 (Second-Year Semi-Intensive Japanese) も行い始め、1973年からは2年間の半集中日本語教育を日本語1-6 (Japanese I-VI) と改め、その後2度のカリキュラム改編がなされはしたものの、概ねこの2本立てのカリキュラムが現在まで踏襲されている。ここまでのコースの編成・スケジュール・単位数等をまとめると次のようになる。

1956年-66年	初級日本語 (Elementary Japanese) 開始。週3日6コマ。
1960年-72年	半集中日本語教育 (Semi-Intensive Japanese) 開始。週10コマ。
1967年-72年	2年目の半集中日本語 (Second-Year Semi Intensive Japanese) 開始。週10コマ。
1973年-95年春	日本語1-6 (Japanese I -VI) 開始。週10コマ。 Semi-Intensive Japanese, Second-Year Semi-Intensive Japanese の改名・内容変更。
1995年秋-2000年春	日本語教育プログラム改編 (日本語7を加え、日本語4-7を中級)。週9コマ。
2000年秋-現在	新日本語教育プログラム (日本語7を廃止し、日本語1-6 [初級1-3, 中級4-6]) 開始。週10コマ。

1995 年秋学期から実施されたモジュールは、92 年度後半から既に検討され始めていた。モジュールが出てきた背景にはいくつか考えられる点があるが、先ず当時、学習者の 4 技能のアンバランスが顕著に見られるようになり、また学習目的が多様化することにより、必ずしも 4 技能を同時に同レベルで教育することが学習者のニーズに合わなくなり、現実的に困難になってきたことが挙げられる。また、初級教科書開発に伴い、JLP 全体のカリキュラムを検討し、4 技能（聴き／話し／読み／書き）各々の初級・中級・上級の到達目標／学習目標が設定された際、学習者のニーズにきめ細かく対応するためには日本語 1 から 6 までの各レベルの 4 技能（聴き／話し／読み／書き）を別立てにし、学習者自身が各技能をレベル別に履修することを可能にするようなカリキュラムが望ましいという結論に達した。

また、カリキュラム改編に際し、日本語 7 を新たに設置し、日本語 1-3 を初級、そして日本語 4-7 を中級とし 4 レベルに分けた。従来 2 レベルに分けていた上級コースが 1 レベルに統合されたことに伴い、中級の幅を広げ、かつ上級への橋渡しとなるコースとして日本語 7 が設けられたのである。

各コースの内容はコアと聴き／話し／読み（中級のみ）／書き 4 技能の選択部分のモジュールからなっており、履修生はコアの 5 コマと選択（初級は 3 つの中から 2 つ、そして中級は 4 つの中から 2 つ）の 9 コマを取り、日本語 1-3（初級）は 5 単位、日本語 4-7（中級）は 6 単位とした。

コアに相当する内容に関しては、例えば、初級のコアでは初級テキストの本冊（フォーメーション・ドリル・ロールプレイ・読み・漢字）をカバーし、漢字は制限する。また、中級・上級に進む予定の学生は選択で漢字をとるように指導し、そうでない 1 年本科生には漢字は強制しないこととした。

評価基準としては、コアが 60%、そして 1 つの選択 20% で、計 40% となり、総合点 100% となるようにした。

このカリキュラム改編の流れの中で、話し聞き能力は上級あるいはそれ以上のレベルであるが、読み書き能力が充分でない学生のための「読み書き特別教育」を 1994 年度秋学期から開講した。週 10 コマ 6 単位の読み書きの集中教育を行い、1 学期間で話し聞きの能力と見合うレベルまで高めることを目標に置いたコースである。初年度は 14 名、95 年秋と 96 年秋が各々 7 名の履修生がいたが、その後、プレースメントテストの結果ではこの科目履修に相当する学生が数名いない訳ではなかったが、97 年度から 99 年度には履修生の数が非常に少ないため科目として出すことはしなかった。それに代わり、4 技能のアンバランスの学生には中級レベルに登録させ、各学生のニーズに沿って担当教師がかなり集中的に課外で上級レベルまで引き上げるように指導した。そして、2000 年秋からの新カリキュラムでは「読み書き特別教育」を廃止し、必要に応じて個別指導で対応することとした。

時間割<1995年秋-2000春>

J1, 2, 3

月	火	水	木	金
	*Sp		*Sp	
*W(K)	C		C	*W(K)
*A	C	C	C	*A

J4

月	火	水	木	金
	*Sp	*R	*Sp	
*W	C	*R	C	*W
*A	C	C	C	*A

J5, 6, 7

月	火	水	木	金
	*Sp	*R	*Sp	
*A	C	R	C	*A
*W	C	C	C	*W

C: Core Course

*: Elective course Sp---Speaking, A---Aural, R---Reading, W---Writing

95年秋学期終了後、新カリキュラムの反省会で、選択部分の履修生数に非常にばらつきがあり、学習者が数人しかいないコースの存在意義についての疑問が出た。そして、何セクションになるのか予測が立ちにくいこのようなカリキュラムがプログラム運営上可能かという疑問が出た。これは JLP 履修生数が減少した時期とも重なっており、モジュール案を検討していた 80 年代終りから 90 年代前半の時期には想定できなかったことである。その後の学期でも同様の問題を抱え、モジュールカリキュラムは理想的ではあるが、現実的な運営上の問題が多すぎて継続不可能であるという結論に達し、2000 年度秋学期から新カリキュラムを実施する事となった。

新カリキュラムの J コースは、毎日 2 コマ週 10 コマの 6 単位コースとし、話し言葉系と書き言葉系の割合を日本語 1 から 3 (初級) は 6 : 4、中級を以前の 3 レベルにして、日本語 4 は 5 : 5、そして日本語 5 と 6 は 6 : 4 の割合というように、レベルが上がるにつれて次第に話し・聴き重視から読み・書き重視に移行していくようなカリキュラムにした。中級と上級の橋渡し役を担っていた日本語 7 は、週 9 コマから 10 コマに増えた 1 コマ分を積み上げて部分的に中級に吸収されると同時に、また「上級 1」「上級 2」の 2 段階に分けられた上級の中の「上級 1」に部分的吸収されることとなった。

時間割：日本語1-6＜2000年秋- 現在＞

	月	火	水	木	金
2限	X	X	X	X	X
3限	X	X	X	X	X

2. コースの内容

2-1. コースの目的

Jコースは、コミュニケーション能力（話しことば・書きことば双方を含む）の基礎を固めることを目的とする。ゼロから始まり、中級の終わりまでを、インテンシブコースの半分の速度で進む。

2-2. 扱う技能

4技能をバランスよく向上させていくが、最初は話しことばを重視し、段階が上がるにつれて、書きことばの割合が増える。

2-3. J1～6の基本的性格とコマの内訳

コース	レベル	基本的性格
J I	初級	話しことばを中心とし、正確さ・適切さを重視、言語運用能力を高める。
J II	初級	同上
J III	初級	同上
J IV	中級	話しことばから書きことばへの橋渡しを行う。
J V	中級	書きことばの割合をさらに増やす。
J VI	中級	上級への橋渡しを行う。

上の表に示した各コースの基本的性格を踏まえ、各コースでは以下のようなコマの内訳で授業が行われている。

コース	コマの内訳	注
J1	Speaking & Listening (文法を含む) Formation & Drills 4~5 コマ Roleplays 1 コマ Listening 1 コマ Reading & Writing 2 コマ Reading(含:作文) 1 コマ テスト 0~1 コマ	1) 主となる教科書 "Japanese for College Students 2) 進度: 1 課を 10 コマで行い、週 1 課ずつ進む。 3) 話しことばと書きことばの時間配分は 7 : 3 から 6 : 4 である。
	計 10 コマ	
J2	Speaking & Listening (文法を含む) Formation & Drills 4~5 コマ Roleplays 1 コマ Listening 1 コマ Reading & Writing 2 コマ Reading(含:作文) 1 コマ テスト 0~1 コマ	1) 主となる教科書 "Japanese for College Students Vol. 2 2) 進度: 1 課を 10 コマで行い、週 1 課ずつ進む。 3) 話しことばと書きことばの時間配分は 7 : 3 から 6 : 4 である。
	計 10 コマ	
J3	Speaking & Listening (文法を含む) Formation & Drills 4~5 コマ Roleplays 1 コマ Listening 1 コマ Reading & Writing 2 コマ Reading(含:作文) 1 コマ テスト 0~1 コマ	1) 主となる教科書 "Japanese for College Students Vol. 3 2) 進度: 1 課を 10 コマで行い、週 1 課ずつ進む。 3) 話しことばと書きことばの時間配分は 7 : 3 から 6 : 4 である。
	計 10 コマ	

J4	教科書：		1) 主となる教科書『ICU 中級日本語 1』 または、その他市販の教材 2) 進度：1 課を 10 コマで行い、週 2 課 ずつ進む。 3) 話しことばと書きことばの時間配分 は 5 : 5 である。
	漢字	1 コマ	
	語彙・文型(口頭練習)	2 コマ	
	読解	2 コマ	
	教科書からはなれて：		
	作文	1 コマ	
	聴解	1 コマ	
	話し方	1 コマ	
	速読	1 コマ	
	ビデオ/プロジェクト/スピーチ	1 コマ	
	計	10 コマ	
J5	教科書：		1) 主となる教科書『ICU の中級日本語 2』または、その他市販の教材 2) 進度：1 課を 10 コマで行い、週 2 課ずつ進む。 3) 話しことばと書きことばの時間配 分は 5 : 5 である。
	漢字	1 コマ	
	語彙・文型(口頭練習)	2 コマ	
	読解	2 コマ	
	教科書からはなれて：		
	作文	1 コマ	
	聴解	1 コマ	
	話し方	1 コマ	
	速読	1 コマ	
	ビデオ/プロジェクト/スピーチ	1 コマ	
	計	10 コマ	
J6	教科書：		1) 主となる教科書『ICU の中級日本語 3』または、その他市販の教材 2) 進度：1 課を 10 コマで行い、週 2 課ずつ進む。 3) 話しことばと書きことばの時間配 分は 4 : 6 である。
	漢字	1 コマ	
	語彙・文型(口頭練習)	2 コマ	
	読解	2 コマ	
	教科書からはなれて：		
	作文	1 コマ	
	聴解	1 コマ	
	話し方	1 コマ	
	速読	1 コマ	
	ビデオ/プロジェクト/スピーチ	1 コマ	
	計	10 コマ	

2-4. 使用主教材

J1、J2、J3（初級）で使用している国際基督教大学著『ICUの日本語 初級 Japanese for College Students: Basic』（講談社インターナショナル）の1、2、3巻は、大学生を対象とした、語彙、会話、文型、表現（以上、聴く／話す）、漢字、読解、書き方（以上、読む／書く）を含む総合的な初級教科書である。各巻10課（合計30課）から成り、約300時間のプログラムを想定して作られている。語彙は全3巻で約2000語、漢字は400字である。

J4、J5、J6（中級）では、多くの場合『ICUの日本語中級1～3』（試用版）を使っていたが、クラスによっては担当者の判断で市販中級教材を主教材として、或いは補助的に用いることもある。J4では『中級の日本語 An Integrated Approach to Intermediate Japanese』（The Japan Times）、『テーマ別 中級から学ぶ 日本語』（研究社）、『基本漢字500 Vol.2』、J6では『どんな時どう使う日本語表現文型 500 中・上級』が使用されている。各クラスとも、主テキスト以外に、適宜コピー教材も配布され、ビデオを題材とした授業も行われている。

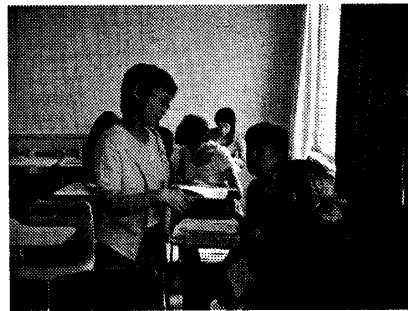
2-5. 評価

J1、J2、J3（初級）では、ディクテーションクイズ、語彙クイズ、文法クイズ、漢字クイズ、学期中のテスト（4回）、期末テスト（筆記テストと会話テスト）が行われる。その他にワークシート、作文、また初級後半ではプロジェクト発表、プロジェクトレポートの結果をもとに、総合的に評価が行われる。

J4、J5、J6（中級）では、漢字クイズ、構文クイズ、語彙クイズ、学期中のテスト（3～4回）、期末テストが行われる。その他にワークシート、スピーチ、インタビュー、討論、プロジェクト発表、作文、プロジェクトレポートの結果をもとに、総合的に評価が行われる。



根津 真知子



日比谷 潤子

授業風景（2003年秋学期）